

嶺山嶺文翁
頌德碑建設記念誌



嶺山嶺文翁

（明）文徵明著。文徵明，字徵明，號衡山居士，長沙人。官至翰林院待講，人稱文待講。其書學歐陽，筆意雄渾，氣度超脫，與祝允明、王穉登、唐寅齊名。

序

祖父嶺文が亡くなつたのは九十一才だつたが亡くなる直前まで里久浜で鍛をふるつていた。

そして、死ぬまでにもう一べん里久の川に水車を造るんだといつて執念を燃やしていた。

亡くなる二年ほど前のことだつたと思うが、水車に使う椎の木を前山に切り倒してあつて、その木

を見るのにまだ小学生だつた私をつれて前山に登つたことがあつた。

谷間谷間に巨きな椎の木が倒されており、一本一本見て廻つた。

全部の点検を終わつた頃にはもう陽は相当傾いていた。

とうとう暗い夜道を手探りで帰る羽目になり、村では捜索隊を繰り出す騒ぎになつた。

幸い無事帰りつくことができたが、今でも当時の祖父の年齢を思いあわせて背筋が冷たくなるのを覚える。

祖父は前山の外に「ヤダ」にも大きな松ノ木を倒してあつた。

祖父からその松ノ木をくれとせがまれた持ち主も、まさか九十才を越すじいさんの手に負えるもの

ではないと思い、軽く応じてしまつたらしい。

しばらく経つて、片手の斧で切り倒しにかかつたとき、そば近くで砂糖づくりをして了一群の人達は呆れた思いで見ており、そのうち諦めて帰るだらうぐらいに思つていただらしい。

朝から聞こえていた斧の音は屋を過ぎても止まず、夕方になつて突然ザワザワゴッオーという大きな音がするのでビックリして振り向くと、あの大きな松ノ木が今しも倒れるところだつたという。その時見ていた人たちは期せずして「万歳」を叫んだという。



嶺山嶺文翁頌徳碑



熊元知一氏



前田好文氏

祖父が亡くなるときはおよそ一ヶ月ぐらい寝ていただけで、それこそ大往生だつた。

それまでは、それこそ雨の日も風の日も、一日として休むことなく里久の浜に通つていた。

今、石碑の建つているところは当時台風の時は波が打ちよせる浜であつた。

祖父はここで毎日鍛をふるつていたが、一度台風に襲われるとそれは無惨なものだつた。しかし、このようなとき、祖父が一度も口惜しそうな顔をしたことがなかつた。きまつて「今度こそいい具合になつた。台風が土をいっぱいもつてきてくれた。」と云つて一つも落胆の色を見せなかつた。内心、口惜しくないはずはないのだが、オクビにもそれを出さないので、「もうろく」しているのではないかという声までよく聞かれた。

祖父が死の直前まで愛着惜かなかつたその地に、立派な石碑が建てられた。

一介の農民のためにこのような碑が建てられるなど、全国的にも大変珍しいケースといえよう。これは前田好文氏を先頭に熊元知一氏が自ら直接責任者となつて、地元をはじめ全国を行脚して郷土出身者に呼び掛け、篤志を募つて実現したものである。

寄せられた寄付金の額もさることながら、軒並に一戸の洩れもなく賛同して下さつてあるその事実にただただ頭が下がるものである。

この記念誌は皆さんのが厚志を永く後世に伝えたいという思いで発行したものである。

発行に当たつては土持明弘氏に格別のご配慮を戴いたことを付記して感謝の意を表したい。

嶺山文忠

目次

趣意書

除幕式 挨拶 全戸洩れない協力に感激

建設委員会会長 前田好文

経過報告 校区民の総意を体して

同 事務局長 熊元知一

祝辞 清貧に甘んじ不屈の闘魂

徳之島町長 秋武喜祐治

祝辞 後進の心の灯火に

徳之島町議会議長 木場友吉

祝辞 農民の勲章

花徳校区民代表 山口清雄

謝辞 感激に身の震える思い

遺族代表 嶺山文忠

特別寄稿

農民のいしづみ

徳之島町教育委員長 山口清雄

寄付者芳名録

素晴らしいふるさとせいか徳

私たちは、「花徳」という素晴らしいふるさとをもつてゐることをこよなく幸せに思います。

村を囲む深い緑の山々、到るところに清れつな小川の流れ、肥沃な土地、東に洋々とした紺碧の太平洋、人情豊かな平和郷花徳を想うたびに、そんな故郷をもつことに限りない誇りと、よろこびを覚えます。

このように美しいわが故郷は、多くの先人たちが長い間あらゆるかん難辛苦を経て當々と築き上げてきたものであることはできません。

中でも嶺山嶺文翁が残してくれた数々の事績は、わが花徳にとつて大きな遺産となり、人びとに限りない恩恵を与えておりますが、もうこの事を知る人も少なくなつてしまひました。

嶺山嶺文翁の主な事績

「前山」をはじめ部落共用林の確保

ご承知のとおり、花徳をとりまく周囲の緑豊かな山々は、すべて部落の共有財産として代々受け継がれてきております。

徳之島全島はもとより、奄美大島全郡にわたつて、山という山はほとんど官山（国有）となつているのに、ひとりわが花徳だけが、なぜ一部落でこんな広大な共有財産を持つことができたのでしょうか。それは次のような経緯によるものです。

明治初期、政府の地租改正にあたつて、政府役人は花徳においても他の地区と同様、花徳周辺の全山を国有とするよう手配をすすめておりました。

このとき境界設定に立ち会つた嶺文翁は、執拗に役人に食い下がり、官山（国有）となつた場合のことを根堀り葉堀り訊き質したそうであります。

このとき役人から「官山となつた場合は税金は一銭も納めなくてよい。その代わり一切官山に立ち入ることは許されない」という説明を聞き、即座に「税金は納めるから花徳周辺の山だけは官山にしないで下さい」と嘆願し、役人も嶺文翁の熱意にほだされてこれを了承し、危うく国有化を免れたのであります。

今から考へると他愛もない」とのようですが、当時の島民意識としては、重税を恐れる気持ちを多くにもつており、それだからこそ全郡島にわたつて役人の言いなりに貴重な山を国に献上したものと思われます。

こういう時代に嶺文翁の示した決断は後の世の部落の人々にどれだけ大きな恩恵をもたらしたことでしょう。

今に到つて他の部落の人たちが、花徳を羨しがる大きな要因の一つとなつております。

トンネルを掘つて水利を図つた

嶺文翁が花時名の近くのカマツチエにトンネルを掘り、多くの人々に水利を図つたことも有名です。当初この計画は、周囲の人たちから本気にされていませんでしたが、嶺文翁は独力で遂にこれを完成、付近の人たちに公平に水利の便を供したのであります。

このため、里久の県道以東の地域及び、現東天城中学校付近に広大な美田が造成されることになりました。

亀田井の水利工事で天分を發揮

嶺文翁は水利工事には天分とも言うべき抜群の才をもつており、花徳の多くの水利工事を手掛けておりますが、なかでもフウ井（亀田井）の水利工事は嶺文翁の面目を躍如たらしめております。フウ井の井堰の水を何処までもつてくることができるか、村を挙げての大きな論議的となつていましたが、嶺文翁は大勢の予想をはるかに上廻る地域への導水に成功して村人たちの期待に応えたのでした。

この外部落の井堰工事には率先して指導的な役割を果たし、花徳が郡内有数の水田地帯となつた基礎づくりに貢献しています。

独創的だった仕事の数々

嶺文翁の仕事は常に独創的で、花徳に多く使われている石垣の大石は、嶺文翁が考えだした独特な運搬方法で運ばれたといわれています。

当時の細い、曲がりくねつた道を大勢の人間で運ぶのには、この特殊な運搬方法（ビービヤーガテという）でなければ工事そのものがおぼつかなかつたことでしょう。

この外、大雨の日にできる水流を利用して山を開き、田を造る工法を広めたり、使いやすい農機具を案出したり、幅広い足跡を残しています。

嶺山橋の由来

以上のような嶺文翁の事績に鑑みて、県当局におかれてもその功を賞し、里久川に架かっている橋に、嶺文翁の名を冠して「嶺山橋」と命名されました。

紹介

嶺文翁は昭和九年、九一才で亡くなっていますが、亡くなる直前まで気力は衰えず、水田造成のため里久浜で単身黙々と鍬をふるつていた姿は当時の村人達に深い感銘を与えたものでした。

嶺文翁はその生涯を通じ無欲でんたん、清貧に甘んじ献身的に部落のために尽くしてきた人です。

私たちの故郷花徳にこうした有徳の先人をもつたことは、私どもの大きな誇りといわなければなりません。

そこで遅過ぎではありますが、有志相寄り、この際嶺山嶺文翁の頌徳碑を建立することにいたしました。

こうした先人の遺徳を顕彰することは、単に花徳の名誉のためばかりではなく、後進の心の灯火ともなり地域振興の上にも大きな意義があることと想います。

何卒有志諸賢のご理解とご協力を賜りますよう謹んでお願いを申し上げます。

昭和五十二年一月

嶺山嶺文翁頌徳碑建設委員会

発起人代表

事務局長

熊前元知好一文

除

幕式（昭和五十二年八月二十日）